
ニューヨーク・ラブストーリー / エピソード11:スーパー・モデル体験！？(Vogue)

栗須じょの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニコ・ヨーク・ラブストーリー／エピソード11・スーパー

モデル体験！？（vogue）

【Zコード】

Z9805D

【作者名】

栗須じょ

【あらすじ】

日本に出張中のポールとデイーン。ポールがこの国に来たのは、デイーンの好きなファッショングランド、タータ・ショウのファッショングローにヘアメイクとして招かれたため。恋人の仕事を見学しようと、ショーの会場を訪れるデイーンだが、そこで彼は出演モデルと間違えられてしまう。誤解はとけたが、デザイナーのタータ氏はデイーンに舞台に立つことを提案。「冗談じゃない！」と嫌がるも、ポールからも頼まれ、だんだん断れない雰囲気に。しかし話

が進むにつれ、ディーンは「この仕事をこなせば、ポールにカッコいいところを見せてやれるかも」と考える。にわかファッショニモ デルは無事に大役をこなすことができるのか？

(前書き)

これらは一話完結のシリーズ物について、ヒッソード第1話からお読み頂けると分かり易いと思います。（本作は前話『第10話：よつこそサムライの国へ』の翌日のストーリーとなっています）連載はまだまだ続きますが、本作品においては完結しています。

「誰か有名な日本人の名前を挙げる」と言われたら、みんなは誰を思い浮かべる?

レノンの未亡人、ヨーロ・オノ。マリナーズの外野手、イチロー。ドラマ『ヒーローズ』のマシ・オカ。トライベッカにあるレストランのオーナー、ノブ（フルネームは知らない）。これに加え、おれは服飾デザイナーの名前も何人か挙げることができる。

日本人がデザインするアートは独特の雰囲気があり、その発想の特異性と芸術性は、おれのクローゼットにまで及ぶほど。アメリカ人には思いつかないフォルムと繊細な色合い。今着ているジャケットはショウ・タニタの作品で、これはソーホーで買ったもの。ついさきほど、通りの向こうに彼のショップを見た。「こんなところにも店舗があるんだな」と思ったのだが、よく考えればそれは当たり前。ここは日本で、ショウジ・タニタは日本人なのだから。

ここは東京のショッピングストリート。ファッショングループが集う街であることは、立ち並ぶブランドショップを見れば一目瞭然。おなじみのロゴがずらりと並い、異国にいるということを感じさせない佇まい。GAPとスタバとマクドナルド。歩いて家まで帰れそうだ。

こんな風にのんびり街を散策しているのは、昨日でおれの仕事が終わつたから。一日だけの現地休暇、明日は帰国の運びとなるこの日、ボーランドのポールは仕事に従事している。彼が日本に招かれたのは、おれの好きな日本人デザイナーのひとり、ショウ・タニタから仕事を依頼されたため。かつて日本に住んでいたポールは何度か彼の仕事を引き受けたという。本日行われるファッショングル

ヨーで、ヘアメイクを担当するポール。その肩書きは“エグゼクティブ・ヘアメイクアップアーティスト”。素晴らしい響きに、おれが感嘆すると、ポールは「そんなの適当につけただけだよ」と言つ。「タニタさんが面白がつてつけてるだけ。“エグゼクティブ・アシスタント”とか“スーパー・フィッター”とか。彼はそういう人なんだ」

ポールはそう謙遜するが、肩書きは肩書き。「うちの社内でも“営業課のレーザービーム”とか“企画部のパトリオットミサイル”とかがいるが、そういうのとはワケがちがう。肩書きはアダ名以上に意味のあるもので、“市長”ってタスキと同じくらいクールな威力を放つている。

「もし興味があつたら」と、ポールがくれたファッショニショーンの招待状。シヨー自体に興味はないが、恋人が手がける仕事であれば見てみたい。こんな機会でもなきや、足を運ぶこともないイベントに違ひない。

大通りの裏手、小さいながらも個性的なショッピングが立ち並んでいるこのエリアは、マンハッタンに置き換えるとノリータ地区といった雰囲気だ。しばらく辺りを散策し（誓つて迷つていたわけじゃないぜ。“散策”だ。）ようやく発見したのは、タイル張りのこじんまりした建物。ここで間違いないだろうかと、地図を確認していると、突然「ちょっと！」という声が辺りに響き渡つた。

反射的に声のした方 頭上を見上げると、テラスから身を乗り出すようにして、ひとりの男性がこちらを見ていた。

「ちょっと！ 何してんの！ 早く楽屋に来なさい！」
え？ これはおれに呼ばれてる言葉なんだろうか？ 辺りに人は居ず、該当する人物は他に見あたらないが……？

「なにポケーっとしてんの！ あなたよ！ あなた！」

決定。彼はおれに話しかけてる。英語で話しかけられている時点で、おれへの呼びかけと理解してもよかつた。でもどうして？ 明らかに彼は知り合いじゃないんだが。

「いそいで！ ショーの開始まで間もないんだから！」

よくわからないが急がなくてはならないらしい。おれは建物に飛び込み、勘を頼りに楽屋を見つけ出す。

モデルとスタッフでごったがえしていたが、すぐにポールを見つけることができた。

「あれっ、ディーン？ 何でここに？」

おれを見、不思議そうな顔をするポール。知り合いじゃない奴に『早く来なさい』と言われ、知り合いからは『何でここに？』と訊ねられる。おれの作法に何か間違いがあつたのだろうか。

「よくここに入れたね？ しかもこんなに早く来るなんて」

「早く来なさいって言われたからな。さつき」

「さつき？ 誰に？」

「ああ、誰かな。知らない人だ。シマのシャツを着たヒゲの……」
と、説明しかけたところで、その人物が登場した。

「ああ、やつと来たのね。待つてたわ」

シマのシャツを着たヒゲの男。東洋人だが英語は上手い。そしてどうやら、おれを待つていたらしい。

「すぐにフィッターに調整してもらつて頂戴。あそこにいる彼がそ
うだから」

ぽんぽんとおれの肩を叩く彼。どこかで見たような顔だが、やつぱりおれの知人ではない。

去りかけた彼を、ポールが慌て引き止める。

「あの、タニタさん。彼は違うんです」

「ちがう？」タニタさんと呼ばれた男は振り向いた。

「彼はモデルじゃなくて、ぼくのボーイフレンドなんです。今日は一般客で来てるだけで」

タニタさん。そうか、これが“ショウ・タニタ”。服は持つてるが、デザイナーの顔までは覚えていなかつた。

タニタさんは両手で頬を押さえ「まー！」と、すっとんきょうな声を出す。

「あらあら、やだわ。あたしつたら、てつきり……すごい勘違い！」「

ゲイの仕草は万国共通。人種や言語が何であれ、仕草によつて誰

が“そう”で誰が“そうじゃないか”的見分けはつく。

「それじゃあ、まだ本物のモデルは来てないってわけね。せっかく事態が進展したかと思つたのに」そう言い捨てて、彼はブランド服と裸同然のモデル（男だ。残念）の間に消えていった。

「……なんだつたんだ？ 今のは？」

「きみはモデルと間違えられたんだよ。来るはずのモデル。どういうわけか時間になつても現れなくつてね。それでちょっと現場が混乱してる。「ごめんね、気にしないで」

「時間になつても現れない？ どうして？」

「わからない。連絡がないんだ」

「事故かな？」

「そうじやないといいけど」

「おれ、何か手伝おうか？」

「ありがと。でも大丈夫。まだ始まらないから、どこかでお茶でもしてきたら？」このあたり、いいカフェがいっぱいあるし

涼しい顔で周辺情報を述べるポール。おれが大変なときに助けの手を差し伸べてくれた彼に対し、何かしてやりたいという気持ちを持つのは当然のこと。しかし彼は少しもパニックに陥つておらず、またおれの助けも必要としていない。なんだかそれつて残念だ。おれだつてパートナーの役に立ちたいし、ここで恋人の窮地を救えば、ドラマ的には完璧な流れ。『ああ、ディーン。きみつてほんとに頼りになる（はあと）』……なんて、馬鹿な冗談を言つてゐる場合じやない。ポールが困り果てていはないのはもちろんことだ。

このままここにいて樂屋裏を眺めていたい気もしたが、それはやつぱり邪魔というものだろう。開演までにはまだ時間がある。ポールが勧める通り、どこかカフェで一服してきたほうがよさそうだ。樂屋を出ようとしたとき、「ちょっと待つて」とポールが声をかけてきた。何だ？ キスの忘れ物か？

おれが“忘れ物”を頬に着地させることをしなかったのは、ポールがタニタさんを伴っていたから。

「さつきは怒鳴りつけて『めんなさい』とタニタ氏。『」」ひたちも緊急事態だつたもんだから

「いえ、お気になさらず」モデルと間違えられるのは日常茶飯事ですから。

「それでねえ、わたし考えたの。頼みがあるの。このままモデルが来なかつたら、あなた、代わりを務めてくれないかしら？」

意味を把握しきれず、きょとんとしていると、彼は続けて言つた。「だからね、ショーに出て欲しいの。モデルとして」

「誰が？」

「あなた」

「無理です」

「簡単よ」

「いえ、簡単とかいう話でなく」

「お願い。わたしたち本当に困つてゐる。人助けと思つて」

神に祈りをささげるかのように、両手を胸の前で組む。これが10才の美少女であれば、ほだされたかもしれないが、彼のビジュアルがあれに冷静さを失わせることをさせなかつた。

「他のことによければ何かお手伝いしましょ」

「他のことは足りてるわ」

どつちもかなり頑固だ。おれ陣営のポールはと見ると、ただ黙つて話を聞いているだけ。

「最初にあなたを見たとき、モデルと間違えたのは、あなたがあまりにも服のイメージと合つていたからなの。まさにわたしが指定した人物がそこにいた。これはそういうことなのよ」

そういうことって、どういうことだ。

「モデルが不在で窮地に陥つたわたしたちを助けるために、あなたはカミサマから派遣されたのね。まさに救世主！ あなたは天使よ、

ディーン！」

どんなに持ち上げられたところで、嫌なものは嫌だ。

「ステージの中央まで歩いて行って、それで戻ってくるだけ。大丈夫。簡単よ。ね、ありがとう」

“ありがとう”って何だ。こつちは引き受けと黙りてない。

「まつてくれ！ そんなの困る！」と叫んだときに、彼は居す。おれはポールに訴える。「冗談じゃない。困るよ。ポール、彼になんとか言ってくれ」

「心配することないよ」とポール。てつきりタータさんに提訴してくれるのかと思いきや、「これは小規模なキヤットシヨーだから」と続けて言う。「別にテレビ局が来てるわけでもないし、スタッフはみんな優秀だもの。大丈夫、そんなに心配しないで」

「ポール、きみは……もしかしておれの味方じゃないのか？」

「ごめんなディーン、ぼくは仕事で来ているんだ。なにがベストか考えた場合、彼の指示が正しいと思う」

困ったように微笑む恋人。これで唯一の援軍を失つた。

「これはローマンの面白パーティじゃない。ステージに立つなんて絶対に無理だ」

「きみはイザとなつたら度胸ある方だと思うな」

「本物のモデルは何してるんだ？ テロにでも巻き込まれてるっていつのか？」

「ね、ディーン。どうしても嫌だつていうなら無理強いはしないよ。でも考えてみて。これつてそんなに難しいことじゃないよ」

“これつてそんなに難しいことじゃない”。難しいことじゃないのにパニックに陥つて喚いている男。ポールの窮地を救うでもなく、ただ自分の保身を考えている。無理強いはしないとまで気を遣われ、「じゃ、おれは外のカフェにいるから」……なんて言えるわけがない！

「本当に難しいことじゃない？」

「難しいことだつたらきみに頼まないよ」

ポールの表情はいつも通り。“難しいことを頼んでいる”という

感じには見えない。ここまで彼が言つんだ。だつたらおれはやれるだろう。ポールは信頼に足る男。それは今までの経験からわかつていることだ。

「オーケーわかった、やるよ。でもほら、あれは何て言つたつけ……キヤットウォーク？ 特別な歩き方とかあるんだろ？」

「最近はおおげさな歩き方はあまりしないね。ただ無愛想に歩くのが主流になってきてる。きみ、得意だろ？」

「得意つて……からかうなよ……」

「ごめん。ちょっとリラックスするかと思つて。あ、オリヴァー・ポールは背の高い男に声をかけた。

「オリヴァー、彼にランウェイでの立ち振る舞いを教えてあげてくれるかな」

立ち振る舞い？ そらみ、やっぱりなんかあるんじゃないか。まったく何の因果でこんなことに。確かにさつきは『何か手伝おうか？』と言つたが、それは簡単な開場準備とか、もしくはジャマにならないようひつそりしてるとか。そういう形で役に立ちたかった。オリヴァーに連れ出され、ステージの袖に立つ。自己紹介をしようとしたら、「きみは臨時のモデルでティーン。さつき聞いたよ」と、こちらを見ずにクールにつぶやいた。氷の彫刻のような面差しのオリヴァー。彼こそがモデルだ。仮面がよく似合つてる。「いや、おれはプロのモデルじゃないんだ。それどころがまったくのシロウトで」

「うん、それも聞いた」聲音はぶっきらぼう。笑顔はゼロ。スマイルを必要としない職業により、顔の筋肉が活動を停止したのかもしない。

「ただステージを歩くだけじゃ駄目なんだな？」

「別に難しくはないよ。ちょっとしたコツみたいのがあるだけだから

その歩き方はダンスと似ていた。イチ、二、サンで160度タン。テンポは2ビート。肩甲骨は内側によせる。確かに難しくはない

いが、問題はステージでこれができるかということだ。

最後にオリヴィアは「ランウェイでは絶対に笑わないこと」と、

彼が日常でも守っているであろうポイントを伝授してくれた。

客の前でスマイルを浮かべない。おれの職業とは真逆のルール。しかし今の自分には簡単なことだ。恐れと緊張で、表情筋のすべてが死んだ。

身内が死にでもしたような表情のおれに、タータさんが明るく声をかける。

「ねえ、デイーン。ステージに立つのは素敵な体験よ。そんなにナーバスにならないで、ハングジョイしてくれると嬉しいわ」

『エンジョイして』。この台詞、まるでローマンそっくりだ。くすりと思い出し笑いをするおれに、「ほら、笑った方がずっと素敵。ね、楽しんでちょうだい」と、嬉しそうに言つ。

「笑つたらいけないんじや？」

「まあ、そうね。舞台の上でエヘラエヘラされるのは困るわね。だからといって心の中まで無表情でいるってのはつまらないじゃない？ せつかく素敵なお洋服を着てるんですけどもの。あらやだ、これつて自画自賛かしら？」

ひとりでしゃべつて、ぐるぐると表情を変えた。本当に彼はユニークだ。サムライの国にも“ローマン”はいた。どうやらこの国は独自の進化を遂げているらしい。

「今日のあなたは、あたしの“スペシャル・ゲストモデル”ってことで。ねえ、なんだか楽しくなってきたわ」

彼の言葉に、“ほらね”という顔で、おれを見るポール。いや、これは普通にアダ名だろ。“エグゼクティブ・メイクアップアーティスト”ってのとは違うと思う。

「それじゃ、あたしはお客様のお相手をしてくるから。ポールは彼氏をキレイにしてあげて頂戴ね」

タータさんは手をひらひら振つて去つていった。もし彼がユニークに来ることがあれば、ぜひローマンと引き合わせたい。バツ

トマン対スーパー・マンに匹敵する好カードだ。

ポールはおれを椅子に座らせ、首まわりにケープを巻いた。ハサミを手に「少しだけ髪を切つてもいいかな?」と聞く。

「ああ、構わない。ちょっとでも見栄えがするよう工夫してくれるのは大歓迎さ。なんたってプロのモデル集団に混ざつて、肩身が狭いんだから」

「きみは他のモデルとくらべても見劣りしないよ。それになんたつて“スペシャル・ゲストモデル”なんだしね。自信を持つていいと思うな」

「それは恋人の欲目だ」

「ぼくは仕事で来てるって言つたら? これはプロの意見だよ。信じて」

『どうやら本気でそう言つてくれているらしい。プロの田か恋人の欲目かはわからないが、少なくとも彼はおれを『他のモデルとくらべても見劣りしない』と思つていい。それならば、そのように振る舞つまでだ。

『ああ、ティーン。きみつてほんとに頼りになる(はあと)』といふのは既に却下。じゃあこいつのはどうだ? 『ああ、ティーン。きみつてほんとにカッコイイ…(はあと)』

ライトを浴び、さつそつとランウェイを進む、スペシャル・ゲストモデル。シヨーが終われば、待つていいのは、瞳に星を浮かべたエグゼクティブ・マイクアップアーティスト。

「やあ、ポール。おれはどうだった?」

「エクセレント! 完璧だ! ああ、きみがぼくの彼氏であるなんて信じられない。とても誇らしい気分だよ……」(暗転)

よし、これだ。さつきはつい取り乱してしまったが、この局面をうまく乗り切ることができれば、おれはポールの助けになるばかりか、ちょっととカッコイイところも見せてやれる。おれがイメージしていた展開通りとは言えないが、パートナーの助けになれるという点では同じこと。ポールはおれの窮地を救い、おれもまたしかり。

日本の想い出は完璧な形で幕を閉じるというわけだ。

服を着せられ、サイズを直され、またそれを脱がされ、ふたたび着せられしているうち、段々その気になつてきた。おれは他のモデルとくらべても見劣りしない？ おれは世界的に有名なデザイナーから、直々に指名されるほど素敵？ 窮地に遭わされた救世主？ そうかもしれない。きっとそうだ。そう思おつ。でないとこの局面を乗り切れる自信が生まれてこないからな！

天は自ら助くる者を助ぐ。これが何らかの運命だとしても、やはり努力は怠るべきではない。

ステージ脇でターンのおせらいをしていると、二人の男性が会話をしながらやつてきた。ひとりは青年、もうひとりは中年。地道な努力を見られることを好まないタイプのおれは、なんとなく幕の陰に身を隠す。

「それはさつきも聞きました」と青年。
「だからロビンスさん、あなたからタータさんに話してほしいんです」

長身の彼はモデルのよつだが、さつきの楽屋では見なかつた顔だ。

「タータさんは来客中だ。話などできない」

ロビンスと呼ばれた男は、太り気味の体型に熊ヒゲを生やしていた。容姿から判断するに、彼はモデルではないだろう。

「そもそも代役の件はタータさんが決めたことだ。きみには残念だが、今回は無理だ」熊ヒゲがそう言つと、モデルは「ぼくは大丈夫です」とキッパリ答える。

「誰よりも立派に努めてみせます。さつき痛み止めを飲んだら楽になりましたから。お願ひです。シヨーに出させてください」
なるほど。会話の内容から察するに、彼は例の“来るはずだったモデル”。なんとかギリギリ間に合つたというわけか。せっかくや

ル気になつたところで残念な氣もするが、やつぱりこれがベストな形。彼はショーキーに出ることを切望してゐるし、おれはそういうんだから。

「お願ひします」と、モーテル。

「もう服のサイズも変えた後だ」と、ロビンス。

「サイズぐらい何とかなりませんか?」と、おれ。もちろん彼らに聞こえないように、こつそりとつぶやく。

ロビンスは厳しい顔で、「きみはすぐここでも病院に行くべきだ」と言つた。

「もう平氣です。痛み止めを……」

「痛みの問題じゃない。衆人環視のなか、一万ワットのサンガン*で照らされるんだ。もしランウェイで倒れでもしたらどうする?」

(* SUNGUN= 照明器具)

一万ワットのサンガン? 衆人環視のなかで、そんなのに撃たれるつてのか? なんだか怖くなつてきた。

「ぼくはプロです。舞台で倒れたりなんかしません」

「すでに代役を決めてある」

「ええ、それは聞きました。なんでもシロウトだとか。そんなの無理に決まつてます」

おい、そのシロウトはここにいるぞ。確かにおれは急場の代役だが、おまえの穴を埋めてやるうと頑張つてたんじゃないか。『無理に決まつてます』など一括されるのはあんまり愉快なことじゃない。「さうまで言うなら」と、ロビンス。「タータさんには一応、話を通しておく。ただ期待しない方がいい。きみであろうとわたしであらうと、交渉するのは難しいよ。彼は一度こつと決めたら、決定を覆すことはめつたにないから

ロビンスよ、交渉の幸運を祈る。ああ、これで肩の荷が降りた。外にタバコでも吸いに行こうかとしたところで、異変に気付いた。ロビンスが去つた後、ひとり残された若者。彼はしゃがみ込んでじつとしている。なんだ? まさかメソメソ泣いているつてわけじゃ

ないだろ？

そつと背後から近づくと、低いうめき声が聞こえた。彼は丸まつて、両手で腹を押さえている。なんだこれは。痛み止めを飲んだんじゃなかつたのか？

「あの、きみ……大丈夫か？」

声をかけると、若者はぱっと振り向いた。誰もいないと思つていたところに呼びかけられ、驚きに目を見開いている。

「びつくりさせて」めん。何か……気分でも悪いのかと思つて」

「別に」彼は短く言つて立ち上がる。その身長はおれとほぼ同じ。黒髪で長身。あごにわずかなヒゲがあり、近づき難い面がまえをしている。タータさんが間違えたのも頷けなくはないが、明らかに異なつてゐるのは年齢だ。彼はおれより五つ以上は若いだろ？

「きみは誰？」と若者。いちいち物言いがそつけない。オリヴァーも必要最低限の単語しか使用しなかつたし、これは業界のマナーなのか。このままではモデルという職種に先入観を抱きそうだ。

「おれはティーン。きみの代理で仕事を頼まれたんだ」

「そうか、きみが……」

“きみがドシロウトの‘ティーンか’。彼は続く言葉を飲み込んだ。そして自分の名前は名乗らない。

「きみには悪いけど、今日の舞台に立つのは予定通りぼくだ。悪く思わないでくれ」

悪くなんて思うわけがない。それどころか間に合つてよかつたと思っている。よかつたが……気になるのは、なぜ今、彼が脂汗をかいしているかつてことだ。

「タータさんがきみを起用したのは、きみが単にここに居合わせただけだからだよ。彼はそういう冗談が好きなんだ」

厳しい目つきでおれを見る。その顔色はグリーン。呼吸は浅く短い。そしてさつきまで床にうずくまつてうめいていた。これらを総合するだに……彼はひどく病氣だ。医者じやなくともわかる。ステージになど立てるわけがない。

「きみは……やつぱり病院に行くべきだろ？」

「ぼくが最初にこの仕事をひきつけたんだ。ぼくはプロだ。最後までやり遂げる義務がある」

「いや、そういう話じゃなくて……」

「これはぼくの仕事だ。ぼくがどんなに努力してここまできたか。たまたま運良く居合させたきみにわかるわけがない」

もちろんそんなことわかるわけはない。彼の言つ通りだ。しかしまったく別のことであれにもわかることがある。“密を相手にするイベント”について、おれは彼よりも知っていることがあるのだ。

「きみ、名前は？」

「二ール……」

誰かれ構わず名前を教えちゃいけないというルールに乗っ取つてでもいるのか、彼は渋々といった感じでファーストネームを自白した。

「二ール、きみの体調は最悪だ。そうだる?」

睨むよつとおれを見る二ール。いや、“よつ”じゃないな。おれは二ールに睨まれている。

「きみは病院に行くべきだ」

「仕事が終わったら行くよ。ダンサーもオリンピック選手も、体調不良くらい構つてない。もちろんモデルもだ。こんなこと言つてもきみにはわからないだろうけど」

「きみがステージで倒れでもしたら、みんなに迷惑がかかるんだ」

「倒れたりなんか。死んでもするもんか」

「死んだら倒れる。だいたいの場合」

「はあ？ 何が言いたいの？」

「たとえきみがプロフェッショナルであつても、死んだら倒れるつてことや。フランク・シナトラだつて、舞台で死んだら間違いなく倒れる。“倒れること”つてのは、きみのコントロール下にあるものじゃない」

おれは二ールに一步つめ寄つた。彼が後ろに退かないので、おれ

たちの間には距離がなくなつた。

「おれはモデルじゃない」

「わかつてゐるよ」

「仕事では接客業をしてる。そこで第一に考えるのは、自分のことじゃないんだ。まず客のことを考え、次に企画全体のことを考え。自分がどうしたいかつてのは、いちばん後だ。きみがやろうとしていることは、確実な結果を上げられるものか？ そうじゃないだろ。“リスクを犯しても”という考え方もあるが、それはきみが決めることじゃない。一ール、きみのしていることはプロとしての頑張りじゃないよ。ただのエゴだ」

一ールは黙つてゐる。黙つて汗をかいっている。

「具合が悪いなら、しばらくそこに座つて休んでいろ。そして少し落ち着いたら病院に行つて検査を受けるんだ。きみはまだ若い。自分のキャリアについて考えるのはその後でも遅くないはずだ」

一ールは黙つてゐる。おれも黙つてゐる。互いの間に沈黙が流れた。当然反論してくるだろうと思つたが、予想に反し、彼は口を閉じたままだった。初対面の人間に説教され、面食らつているのかもしない。それにしても英語が通じる相手で本当によかつた。（ところでこの仕事、日本人はどこにいるんだろう？）

「あらつ、ジーしたの？ 何か顔が変わつたみたい」

おれの変化に真つ先に気付いたのはタータさんだつた。さすがは世界のアーティスト。仕草はゲイだが、サムライより聰い。

「ちょっとスイッチが入つたんです」

「さつきまではオフだつたつてわけね」

「今なら何でも着こなせる気がするな。ヒラヒラでもスケスケでも、どんと来いつて感じで」

「意欲のあるところで悪いんだけどスケスケじゃないの、『めんな

さい。でもその意氣でね。顔はクールに、心はホットに、よ

おれの顔がクールなのは役割に真剣だから。心がホットなのは信念に燃えているから。あれだけのタンカを切った後だ。今や完全に気合が入った。

おれだってニールに同情する気持ちがないわけじゃない。こんな見ず知らずの男に、仕事を横取りされるんだ。彼が誇りを持つてやつている仕事。どうしても立ちたいと思つていてる舞台の代役だ。

これはもう“やりたい”とか“やりたくない”とかいうレベルの話じやない。ポールにいい格好を見せるとか、おれがみつともなくないようとにかく、そんなことはどうでもいい。さっき自分で言つたじゃないか。エゴは二の次。今できるベストを考え、それを実行する。シヨーを見にきている客は、モデルの中にシロウドが混ざっているなど知る由もない。急場をしのぐ代役とか、初舞台にビビってアタフタしてるとか。そんな裏の事情など、何の言い訳にもなりやしない。これはニールのためでもなく、ポールのためでもなく、タニタさんのためでもなく、ましてやおれ自身のためでもない。素晴らしい舞台を期待して、ここに来ている人々のために。今宵、おれは生まれて初めて、一万ワットのサンガンに照らされた。

長く続く拍手に応え、舞台ではモデルたちとデザイナーが客席に向かっておじぎをしている。おれはそこには混ざつておらず、楽屋のパイプ椅子にくずれ落ち、死んだ魚のようになつたりとなつっていた。

「おれ……変じゃなかつたか？」

そつと肩に置かれた手に、目も開けず、そつ訪ねる。

「大丈夫だよ」と、優しい手の持ち主。それはもちろんおれの恋人。

「本当にそう思うか？」

「もちろん。今日初めてモデルになつたとはとても思えないくらい」「そう見えたか？本当に？」

「自分ではどう感じるの？」

「感じるも何も、さっぱり覚えてない。数分前のことだつての！」。

「健忘症かな？」

ポールはくすくすと笑い「素敵だつたよ」と、おれの肩をそつとさする。

「本当、最高。エクセレント。きみがぼくの彼氏であるなんて信じられないくらい。とても誇らしい気分だな」

……嘘くさい。彼の台詞はおれが予測した通りだが、何かどこかが想像と違っている。

「ねえ、ディーン。きみつてほんとに頼りになるな」

運動会でビリの子を励ますような口調。

「きみはぼくたちの窮地を助けてくれた。なんたつてスペシャル・ゲストモデルだしね。ぼくにとつてもきみと一緒に仕事ができたこと、日本でのいい想い出になつたよ」

わかつた。おれが悪かった。だからもうやめてくれ。はつきり言つていたたまれない。ポール、きみも早く健忘症になつてくれ。

「後でビデオをもらえるつて」

「何が？」

「このショーの。帰つたらローマンに見せてあげたいな。彼はタニタブランドのファンだからね……あれ？ ディーン？ どうしたの？」

？

かすかに残つていた生彩が、今、完璧に失われた。初のモデル体験は完全燃焼。完全燃焼の後は、ただ灰になるのみ。灰は灰に、塵は塵に。“スペシャル・ゲストモデル”の銘は消失せり。スーパー・モデルでない普通のおれであることに、今は感謝の気持ちでいっぱいだ。

「ゴー三一クに戻つてすぐ、タータさんからメールが届いた。それによると、あのとき脂汗を流していたモデル、ニールは急性盲腸炎だったとのこと。

「しかも破裂寸前だつたつて。あのまいたら大変なことになつたね」

ポールが見せてくれたメールには、ニールがタータさんに伝えた
という言葉　『キャリアのことは身体が治つてから考えること
にします』と、書かれていた。

モデルの報酬があれの口座に振り込まれ、その金額を見て思わず仰天。とつたに転職を考えるほどの数字がそこにはあつた。おれはニールからこれだけのものを奪つたのか。そりやあ、倒れる危険性を犯してでも舞台に立ちたいと思つはず。なんだか今になつて、悪いことをしたような気になつてきた。

その懸念を口にすると、ポールは「悪いことだなんてどんでもない」と、優しくフォローする。

「きみは何ひとつ間違つたことはしてないよ。ほんとにあれば素敵だつたな……」

「ああ、それを言つのはやめてくれ。恥ずかしくて思い出したくもない」

「そつちじやなくつて」ポールは笑つた。「きみがニールに言つたこと。立派だつたよ。ほんとに素敵だと思つた」

「……え？ どうしてそれを？」

するとポールは肩をすくめ、「見たんだ」と言つ。「びっくりしたよ。きみを呼びに行つたら誰かと喧嘩してゐるんだもの」「別に喧嘩してたわけじゃない」

「あ、そうか。ごめん。じゃ、あれは何？ 話し合い？」

「話し合いつていうか……おれが一方的に彼に説教しただけだ。今になつて考へると、あれはあまりにも図々しかつたな。おれはあそこの関係者でもなんでもないわけだし。まるで自分の部下に言つみ

たいにして、二ールを諭してしまつた

「でも結果的に丸くおさまつた。でしょ？」

「まあな」

「きみの言つたことが正しつてわかつたから、彼は反論できなかつたんだよ」

結果的には丸くおさまつた。結果よければすべてよし。そこに辿り着くまでに、いかなる苦難を受けようとも。たとえばそれは、一万ワットのスポットライトを浴びること。たとえばそれは、口論の末に恋人からの理解を得ること。

おれが最初に空想したのは『ああ、ディーン。きみつてほんとに頼りになる（はあと）』というイメージで、その次が『ああ、ディーン。きみつてほんとにカツコイイ（はあと）』。どちらも想像通りにはいかず、むしろあのショーンのことは、早くポールの記憶から抹消したいとすら思う始末。

おれの人生はいつも思うようにいつたためしがなく、それでもどういうわけか、『結果的には』うまくいっている。

誰もが認める女好きのディーン。それがどういうわけか男友達と暮らすようになり、あまりさえ彼を恋人に選択。かつておれが想像していた未来は、今ここにあるものと同じであるとは言い難く、それでもおれはこの状態を愛していて、『想像を絶する』この結果には満足している。

「今回の旅行はぼくにとつてすゞいい想い出になつたよ。きみにとってもそうだといいけど……」

おれの髪を撫でる優しいタッチ。彼の手をとり、それにキスする。「もちろんおれも同じさ」と言つて。

「いろいろなことがいい想い出になつた。舞台の上でのことは覚えてないけどな」

「だからショーンのビデオを見よつて言つてるのに

「嫌だ。それだけは絶対に嫌だ」

「だつて覚えてないつて言つから」

「きみも忘れるんだ。いいか、おれが10カウントする間に、きみはシートのことも、そのビデオの存在も忘れる……じゅう、きゅう、はち、なな……」

4まで数えたところで、ポールはおれの唇をふさいだ。それは彼自身の唇を用いて。なにより有効な手段に、おれは抵抗を放棄する。

我が家の中にはキャッシュカードの録画DVDがある。未だ一度も上映されず、おそらくこれからも封印されたままの想い出。いつかおれたちが年をとつて、過去のことが恥ずかしくないくらい健忘症が進行した頃に、それは封切られる予定だ。

結果よければすべてよし。むしろこれ以上うまくいくといふ結果なんて、今のおれには想像もつかない。

End .

(後書き)

最後までお読み頂きありがとうございました。
もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。

本作品は「Hピソード12：父の面影（<http://nco-de-syosetu.com/n0528e/>）」に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9805d/>

ニューヨーク・ラブストーリー / エピソード11:スーパー・モデル体験！？(Vo

2011年8月15日03時25分発行